2026 年 11 月 25 日　高の原教会　聖書講座および晩祷会　徳田 信

主が来られる。その日まで

聖書　エレミヤ書 33 章 14〜16 節
　　ルカによる福音書 21 章 25〜36 節

1　主を待つ季節を迎えて

11 月 29 日から、待降節、アドベントに入ります。イエス・キリストの誕生を喜ぶクリスマスに備え、同時に、その主が再び来られて救いを完成してくださる日を待ち望む季節です。

先週と先々週にご紹介したのは、聖書を神の大きな救いの物語として読む視点です。キリストはすでに復活されました。そして主が再び来られる時、主に結ばれた私たちも新しい命に生かされ、ついに死の力が取り除かれます。今も病気や争いがあり、私たちにも心配事や悲しみがあります。その中でも、主の約束に支えられて生きることを、今日あらためて考えたいと思います。

教会では、待降節、クリスマス、十字架と復活を覚える一年を繰り返したどります。同じ御言葉にも、その年の経験を通して新しく気づくことがあるでしょう。今年の暮らしの中で、主を待つ希望を受け取りたいと思います。

2　神は約束を覚えておられる

涙の預言者エレミヤ

エレミヤは、エルサレム近郊のアナトトの祭司の家に生まれました。エレミヤ書によると、紀元前 627 年ごろ、ヨシヤ王の時代に神に召されます。自分は若く、語る言葉を知らないとためらう彼に、神は共にいて支えると約束されました（1 章）。

「涙の預言者」と呼ばれるのは、民の苦しみを自分の痛みとして受け止めた人だからです。8 章 18〜23 節には、傷ついた民を思い、昼も夜も泣きたいという嘆きがあります。神の言葉を語って嘲られ、語ることをやめようとしても、胸の内に火のようなものがあって黙れない。その苦悩も率直に記されています（20 章 7〜9 節）。

国の危機の中で語る

当時はアッシリアが衰え、バビロニアとエジプトが勢力を争っていました。小国ユダもその争いに巻き込まれ、宗教改革を進めたヨシヤ王は紀元前 609 年、戦いで命を落とします。王や人々は大国との同盟に活路を求めました。

エレミヤは、神殿があるから安全だと安心する人々に、身寄りのない人や寄留者を苦しめる暮らしを改めるよう語ります（7 章）。また、バビロンに降って命を守るよう勧めたため、国を弱める者と見なされ、泥のたまった穴に投げ込まれました（38 章）。人々を愛する思いと厳しい言葉が、一人の預言者の中に共にありました。

国が滅んだ後、エレミヤはユダに残った民と歩み、やがてエジプトへ連れて行かれました（43 章）。その生涯には、願いが実現するのを見届けられない苦しみもありました。それでも、神が罪を赦し、人々の心に御言葉を刻む「新しい契約」の希望が語られています（31 章 31〜34 節）。

ダビデからキリスト誕生までの歩み

時代の目安	歴史の出来事	約束と希望のつながり
前 1000 年ごろ	ダビデの王国 ソロモンの時代へ	ダビデの家と王国を支える約束が与えられる。 サムエル記下 7 章 12〜16 節
前 930 年ごろ	王国が南北に分かれる	北はイスラエル、南はユダ。ダビデの王家は 南のユダに続く。列王記上 12 章
前 8 世紀 前 722 年ごろ	イザヤやミカの時代 北王国イスラエル滅亡	アッシリアの脅威の中、正義と平和をもたらす 王が待ち望まれる。イザヤ書 9 章、11 章
前 627 年ごろ 〜	エレミヤの活動 ヨシヤ王から最後の王へ	ユダの罪を告げ、悔い改めを促す。その一方で 「新しい契約」を語る。エレミヤ書 31 章 31〜34 節
前 597 年 前 587／586 年	バビロン捕囚 エルサレムと神殿の崩壊	王や民が連行され、ユダ王国が滅びる。 破局の中で「正義の若枝」の約束。33 章 14〜16 節
前 538 年ごろ 〜	ペルシアのもとで帰還 神殿と生活の再建	キュロス王のもとで帰還と再建が始まる。 ダビデ王家の王位は復活しない。エズラ記 1 章
前 4〜1 世紀	ギリシア系諸王国の支配 独立期を経てローマの支配	紀元前 63 年、ローマがエルサレムを制圧。 神による救いへの期待が受け継がれる。
紀元前後	イエス・キリストの誕生	福音書はイエスをダビデの家につながる 救い主として伝える。ルカ福音書 1 章 32〜33 節

※年代はおおよその目安。「前」は紀元前。捕囚は数度に及び、都の陥落年には 587 年説と 586 年説があります。

正義の若枝の約束

エレミヤ書 33 章では、エルサレムが包囲され、エレミヤ自身も拘束されています。家が壊され、人が死に、日常が失われていく。そのような場で、神が約束を果たしてくださるという言葉が語られます。



神は、ダビデの子孫から「正義の若枝」を出すと約束します。若枝とは、新しく伸びる枝のことです。ここでは、人々を正しく治める王を表しています。先週読んだダビデの時代から、長い年月がたちました。王たちが民を苦しめ、国がまもなく滅びようとしても、神は人々を見捨てず、新しい王を与えると告げられるのです。

その王は、この地に「公正と正義」を行うとあります。弱い人の声が聞かれ、不正が退けられ、人々の生活が守られる、ということです。16 節には、民が救われ、エルサレムの町が安らかになる姿が描かれます。家族と食卓を囲み、安心して眠り、明日も生きていこうと思える。神の救いは、そのような日々の生活に及びます。

「メシア」は油を注がれた者、神から務めを託された者という意味で、ギリシア語では「キリスト」といいます。救い主への期待はさまざまでしたが、教会はこの王の約束を、病む人に近づき、十字架を負われた主イエスの歩みと重ねて読んできました。

捕囚から帰還しても、人々の生活には苦労があり、外国の支配も続きました。その中で預言の言葉が読み継がれ、神の救いを待つ希望が育まれます。ルカは、誕生したイエスを神の救いとして迎えるシメオンやアンナの姿を伝えています（2 章）。

3　その約束が私たちの顔を上げる

ルカによる福音書 21 章 25〜36 節

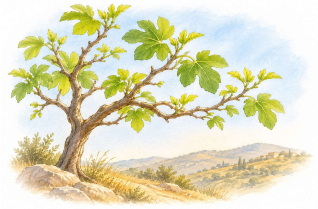
ルカ福音書のこの箇所には、恐ろしげな光景が出てきます。海がとどろき、天の力が動かされ、人々はこれから何が起こるのかと恐れます。主イエスは、旧約の預言に使われている不思議な情景描写を用いて、神が世界に決着をつける時について語っておられます。

この章の前半には、神殿の崩壊や戦争についての言葉もあります。確かなものと思っていた建物や日常が失われる時、人々は途方に暮れます。私たちにも、そのような恐れが身近に感じられるかもしれません。世界の出来事に心を痛めることもあれば、自分や家族の健康を思って眠れない夜もあります。

その中で、主イエスは弟子たちに「身を起こして頭を上げなさい」（28 節）と語られます。そして、続けてその理由として、主が救いをもたらす時が近づいている、と言われます。弟子たちは、その約束に支えられて顔を上げることができます。

ここで「人の子」と呼ばれているのは、主イエスご自身です。この言葉を語る主イエスは、間もなく十字架につけられます。人間の苦しみと死を身に受け、復活される方が、救いを完成するために来られる。私たちが待っているのはこの方です。

悲しみの中にいる人に「元気を出して」と声をかけても、すぐには顔を上げられないことがあります。主の約束は、そのような人にも向けられています。先に希望を見いだした人が、うつむいたままの人のそばに寄り添う。共に御言葉を聞き、暮らしを支える。教会はそのようにして共に主を待ちます。



主イエスはまた、いちじくや他の木々に目を向けるように語られます。葉が出れば、夏が近いと分かります。恐ろしい情景を語った後に、身近な木々の姿があるのは印象的です。弟子たちは、その神の国の訪れに目を向けるよう促されます。人々を苦しめるものが、この世界の最後まで支配し続けることはありません。

33 節では、天地が過ぎ去っても、主イエスの言葉は過ぎ去らないと語られます。私たちの生活は変わります。自分の力では守り切れないものもあります。その中で、主の言葉に立ち帰り、約束を聞き直します。

続いて、生活の心配によって心が鈍くならないようにと語られます。目の前のことで精いっぱいになる時、私たちは主の約束を忘れがちです。主イエスは、目を覚まして祈るようにと勧めます。心配事を抱えたまま主に助けを求める。そして自分と隣人の暮らしを見つめ直す。そのような日々も主を待つ歩みだといえます。

同じ章の 8〜9 節で、主イエスは「時が近づいた」と言う人々に従わず、戦争が起きても直ちに世の終わりと思わないよう戒めています。私たちは出来事から終わりの日を計算することよりも、約束の主に信頼して今日を生きるよう招かれています。

＊解釈が難しいのは、32 節の「この時代」が何を指すかです。しかし、主の言葉を信頼して待ち続けるように、という呼びかけを受け取ることで十分かと思います。

問い　「頭を上げなさい」という言葉を、今どのように聞くでしょうか。すぐには顔を上げられない人と、私たちはどのように共に待てるでしょうか。

4　私たちの小さな働きも用いられる

エレミヤは、エルサレムが包囲されていた時、故郷の畑を買い、その証書を長く保存するよう託しました（32 章）。神はこの地で再び家や畑が買われると約束したのです。また、すでに捕囚となった人々には、家を建て、作物を育て、今住む町の平和を祈るよう手紙を書いています（29 章 4〜7 節）。

この二つの行いには、先の見えない中でも、神の未来を信じて日常生活を大切にする姿があります。聖書学者 N・T・ライトは、私たちの今の働きと、神が完成される世界との関係を、大聖堂のために石を刻む職人にたとえています。

職人は、自分に託された一つひとつの石を仕上げます。建物全体がどのようになるかは、十分には分かりません。それでも、全体を知っている建築家が、それぞれの石を用いて大聖堂を完成させます。つまり、私たちの働きも、神の完成のために用いられる。ライトは、このたとえをパウロの言葉に結びつけて説明しています。



それぞれの手元にある石と、完成した大聖堂。

パウロは、復活について語った章の最後で、主に結ばれた労苦は無駄にならないと告げています（コリントの信徒への手紙一 15 章 58 節）。キリストが復活され、私たちを新しい命に生かしてくださる。その希望が、私たちの日々の働きを支えます。

私たちも、自分のしていることが何につながるのか、よく分からない時があるでしょう。誰かの相談に乗っても、その悩みがすぐ解決するとは限りません。教会で担っている働きも、成果が見えにくいことがあります。それでも、誰かのために割かれた時間や、よい関係づくりのための労苦を、神は用いてくださいます。

ここでの大聖堂は、神がいつか完成させる世界を思い描くたとえです。その完成を担うのは神ご自身です。私たちは自分の生涯のうちに、すべてを仕上げ、見届けようと気負う必要はありません。全体を知っておられる神に委ね、目の前の託された働きに取り組みます。